狂った少年　（佐助夢?

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂った少年　（佐助夢？

【Ｎコード】
Ｎ６１５０Ｍ

【作者名】
峰春秋人

【あらすじ】
狂った少年は人間を玩具呼ばわり。
が、彼の瞳はそれを楽しんでいるわけではなかった。
過去に面倒を見た同居の忍びとかさな合わせて佐助は何を思う。

（前書き）

狂いすぎ★

佐助は目の前に現れた少年に驚愕した。
血をまとって笑顔を見せる。
まるで血を求めて飛び回る蝙蝠のように。

「あんたは・・・何してんだよ。」
「・・・。」

真っ赤な眼光が佐助を睨みつける。
そして、口元をゆがませながら血にまみれた笑顔を向ける。

「玩具(おもちゃ)と遊んでるだけ。」

人を玩具(おもちゃ)というこの少年に佐助は少しながらの恐れを抱いた。
けど、自分が勝てると信じていたから手裏剣の刃を彼に向けた。

「あんたも遊んで欲しい？」
「遊ぶのは俺様だよ。」

首をかしげる少年に対して佐助は苦笑気味に笑って見せる。
強く地を蹴って少年へと突進した。
が、少年の姿はそこにはなかった。そこに少年がいたという証拠は血だまりだけだった。
周りに警戒を抱くもののさっきの少年の気配は感じられなかった。
佐助はちょっと安心した面持ちで手裏剣を下げた。
その瞬間佐助の顔のすぐ右側ですごい殺気を感じた。

「また今度遊んであげるよ。」

佐助の背中を冷汗が流れ落ちた。
殺そうと思えば殺せたのに佐助の手裏剣を握ったその手は動きはしなかった。
殺気が消えたと同時に佐助は息を深く吸いこんだ。

「誰だよ。お前は？」
「罪善愛妬（ざいぜんあいと）。罪は善いと愛に嫉妬するって意味。」

笑いながら少年ー罪善は佐助の前に躍り出た。
佐助は少し間を開けるためにゆっくりと後ろへと足を移動させた。

「お前が名を聞いたから答えたのに。つまんないの。」
「・・・あんたはさ、何がしたいのさ。」
「何って？」

興味がわいたようにゆっくりと近づいてくる罪善に佐助はもう後ずさらず手裏剣を構えた。
それでも罪善はにっこりと笑いながら近づくことをやめない。

「何って？」
「・・・ひとを殺しても笑ってること。」
「だーかーら、ただ玩具で遊んでるだけだよ。」
「人を玩具って・・・。」
「何言ってるの？人身売買とかはその一種でしょ？自分の好きな子を買って好き勝手に弄くりまわす。それを玩具と言わずに何と言うのさ。」
「それと戦場では違うだろ！」
「そうだね。お前の言うとおり。ごもっとも！」

高らかにその言葉を吐く少年。
が、いきなり言葉を止めて足もとめた。

「でも・・・玩具で遊んでるっていうのは単なる言い訳。」
「言い訳？」
「そう。言い訳だよ。本当の訳はねー。」

すっと顔を元の位置までおろすと佐助をまっすぐに見つめた。
その瞳はさっきの殺気に満ちた紅いものではなく冷たくどこか悲しそうな蒼い瞳だった。

「復讐。」
「復讐？」
「・・・。」

黙り込む罪善の瞳がまた紅い瞳に戻っていくのがわかった。
そして、にっこりと口元をゆがませてから佐助との距離をぐっと縮めた。

「人が俺に何をしたのか。それがいくら他人だからと言っても見逃すなんてしないさ。人間は人間。俺をおかしくさせた奴が人間ならほかの奴も連帯責任ってこと。どうせ人間なんて同じことばかり繰り返すだけだからもう二度とできないように息の根でもなんでも止める。俺だけでいいんだ。こんなことするの。」

ぐっと何かをこらえるような仕草を見せた罪善を見て佐助は首をかしげる。
何度か変わる罪善の態度。それが何なのか。

「あんたは本当はさ・・・楽しくないんだろ？」

「・・・はぁ？」

思わぬ佐助の言葉に罪善の目が丸くなる。

「人を玩具とか言ってるけどさ、本当は楽しくも何でもないんだろ？」

「さぁーね。」

そういうと罪善は踵を返して歩いていく。

佐助はその後ろ姿を見て何かを思い出した。

（・・・そっくりだ。同じ里にいたアイツと。）

若かりし頃に面倒を見ていた同居の忍びに。

「おい。」

「何か用？」

「・・・どこの軍だよ。」

「さぁーね。・・・自分でもわからねぇーよ。」

「どういう意味だ。」

「・・・じゃーな。」

そのまま罪善は姿を消した。

佐助はこの数分で起きたことに頭の整理がついていなかった。

人間を玩具と言った罪善と復讐を誓って何かをこらえた罪善。

どちらが本物なのか。それともどちらも本物ではないのか。

「罪善。本当のお前はどれなんだ？」

虚空を見上げて佐助はつぶやく。

できれば罪善に聞きたい。けど、罪善はいない。

朝。
小鳥のさえずりが聞こえて太陽の光を浴びて佐助は起きた。
いつもはさわやかな目覚めなのに今日はなんだかそうではなかった。

「・・・煙？」

東の方角に見えた黒い一本の煙。
眉間にしわを寄せて佐助はいやな予感がした。
けど、偵察にはいかずに真田の部屋へと急いだ。

「一すけ。佐助！」
「ん？」
「どうしたのだ？佐助。お前らしくないぞ。」

真田が佐助の顔を覗き込む。

「ご・・・ごめん。旦那。ちょっと顔でも洗ってくるかな。」

佐助は立ち上がると部屋を出て行った。
一緒にいた信玄を見つめる真田。
信玄も眉間にシワを寄せながら何かを考えていた。

「最近の佐助はあんな調子が続いているな。」
「はい。こないだの偵察からずっと。」
「んー。」

縁側へとでた佐助は顔を洗いに行くことなく自分の部屋へと戻って行った。
目をつぶり考え込む。

（あいつは・・・善斗(ぜんと)はどこに行ったのかな。）
なつかしき仲間を思い出して物思いにふける。

「佐助。」
「・・・旦那。」
「大丈夫か？」
「えーと・・・まぁ、ぼちぼち。」
「んー。俺がお前の給料を上げないからそうなのか？」
「いやいや！あげてほしいのは本当だけどここまではしないよ。ちょっとね・・・。」

躊躇いがちに佐助が罪善のことを話し始めた。
真田の眉間が動いたりして佐助も喋るたんびに感情が入っていき最終的には他人ではないような言い方だった。

「そういうわけ。」
「そうか。お前がこないだ偵察した軍は覚えていないのか？」
「たしか、前田と・・・まさか。」
「ん？」
「前田と松永・・・・。」
「な！？松永だと！」
「・・・大変だ。」

佐助は急いで立ち上がると真田が声をかけるよりも早く部屋を出て行った。
（ここいらでまだ松永が潜伏しているだろう。てことは今朝がたの煙は・・・松永！）
確信したわけではなかったが可能性は十分あった。
（罪善！）
初めて会ったのに他人という気がしなかった。

だから、頭の中で引っかかるし放っておけない。
罪善と善斗の姿を照らし合わせていたのかもしれない。それでも・・・助けたい。
佐助の心はもう止まらない。動き出したら急に止まることはできない。
そう・・・まるで今の時代を現すかのようだ。

煙のそばまで着た途端に佐助は口を覆った。
死体の腐敗したにおいと火薬の臭いとが入り混じって吸いこんだだけでくらくらする。

「罪善・・・。」

転がる死体の中に罪善がいないとは信じていた。
でも、可能性が頭の中にあった。

「罪善！」

叫んでみる。
しかし、返答はない。
それでも佐助の声はやまなかった。

「罪善！罪善！」

何回も呼び続けた。
その時、

「ッ痛。」

というううめき声とともに武器のこすれ合う音が聞こえてきた。
佐助はそちらへとかけて行く。
静かに近づいて死体の影からその姿を見た。
そこに立つのは紛れもなく松永だった。
そして、目の前にいるのは・・・。

「罪善。」

が、罪善は昨日の余裕の笑みを消して体中を傷だらけにして松永を
睨みつけていた。
その後ろには・・・。

「長曽我部？」

怪我をして倒れこむ長曽我部が居た。
（ここは甲斐の東側。なのになぜ瀬戸内の長曽我部が？）
その疑問を頭に佐助は光景を目に焼き付けた。

「松永。俺はお前について行くのはやめる。」
「ほほー。そうか。それは残念だ。だが、その後ろの奴を守る必要
はどこにもないだろ？」
「お前が俺を軍からはずさない限り、この甲斐から出て行かない限
り俺には長曽我部を守る。」
「なぜだ？まったくもって得をするとは思えないが。」
「長曽我部は何も関係ないだろ？ここにたまたま現れた。それだけ
のくせに巻き込んだから責任は取る。」
「そうか。なら死んで責任を取ったらどうだ？」

そういって松永が一歩一歩近づいてい行く。
罪善も二本の刀を逆手で構える。

松永が地面を蹴る。一瞬で罪善のほほが横一文字に切れた。
そして、Uターンして松永が再度地面を蹴った。

「邪魔だな。」
「そりゃどーも。」
「・・・昨日の忍び。」

罪善の目が昨日と同じ瞳にもどる。
松永が笑いながら佐助を見つめる。

「おいおい。ここを甲斐と知っての攻撃かい？」
「おっと・・・こりゃ失礼。」
「さっさと出てけ。じゃないとあんた一人を虎の若子が八つ裂きにでもしちゃうよ。」
「そりゃ困るな。また出直してでも来るとしよう。」

そういうと松永はすんなりと踵を返して帰っていく。
が、途中で足を止めて後ろを向く。

「罪善。お前は私に謀反を起こしたことを忘れるなよ。」

それだけ残して姿を消した。
罪善はしばらくその姿を遠くまで見つめていた。が、急にしゃがみこむと自分の足元に横たわっていた長曽我部に近づいた。

「おい。長曽我部。」
「・・・ッ痛。あんたは・・・。」
「喋ると傷に触る。悪い。俺の軍が通りすがりのお前を襲うとは思わなくて・・・。」
「あいつらは・・・。」

「あいつら？」
「野郎どもだ。」
「ああ。仲間は一応目的地の奥州まで先に行かせた。」
「そうか・・・。ありがとうな。坊主。」
長曽我部は安心しきった面持ちで深い眠りについた。

「何故ここに来た？」
罪善の鋭い眼光が佐助を睨みつけた。
「だから、ここは甲斐の所有地なんだから来て当たり前でしょ？」
「・・・俺は今から奥州に行く。」
踵を返して地面を蹴ろうとする罪善。
が、佐助が罪善の腕をつかんで止めた。

「怪我してんのに無茶するな。」
「無茶じゃない。」
「どうしてそこまでして奥州へ？」
「・・・こいつの仲間に早く知らせたい。すげぇー心配そうな顔で奥州へ行ったから絶対今頃変な想像力働かせて「死んだぁー。」とか言ってると思うからさ。」
「お前って・・・優しいんだな。」
「はぁ？」
「やっぱりな。お前は人間を怨んでいてもどこか人間を好きでもいる。そうだろ？」
「・・・何を言ってるのかさっぱりだ。」
「照れるなって。それよりもほら・・・怪我を治してから一緒に行こう。」

「・・・わかった。」
「くぅー可愛いね。」
なんて笑いながら佐助が罪善の頭をなでる。
罪善はうっとうしそうに手を払いのけると長曽我部を起き上がらせた。
それを佐助が担ぎあげて城へと急いだ。

「なぁー罪善。」
「何だ？」
「お前ってどこ出身？」
「・・・わからない。」
「へ？」

荒れた戦場に似合わない素っとんキョンな声。
罪善の顔は悲しそうだった。

「俺が覚えてるのは自分が人間に売られたことくらいだ。」
「売られたって・・・人身売買？」
「そう。だから俺は人間を憎んで復讐しようとした。でも、罪のない人を殺すことはできない。だけど自分のプライドとかがそれを許さなかった。だから、楽しくもない殺しをしてたんだ。」
「そうか。でも、これからは無理なんかしなくていいんだぜ。」
「・・・今度は記憶を取り戻してみる。」
「え？」
「あんたが俺を知っていたんだ。だから、記憶を取り戻せばあんただって嬉しいだろ？」
「別にしってはないけど、似てたってだけなのにね。」
そういったけど佐助は罪善の頭をわしゃわしゃとなでるとまた歩み

を進めた。
罪善はてれた様子も見せずに小さく消え入りそうな声でつぶやいた。

「ありがとう。」
「ほら行くぞー。」

そういって佐助は声を高らかとあげた。
罪善は駆け足で佐助の背中を追った。
いつかの・・・あの日のように。

（後書き）

長曽我部喋ってない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6150m/

狂った少年　（佐助夢?

2011年4月9日14時29分発行